

アトサヌプリの火山活動解説資料（令和6年7月）

札幌管区气象台
地域火山監視・警報センター

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1-①～③、図2～4）

監視カメラによる観測では、F1噴気孔群及びF2噴気孔群の噴気の高さは300m以下で経過しており、噴気活動は低調な状態です。

11日に国土交通省北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、前回の観測（2021年7月）に比べて、アトサヌプリ溶岩ドームに点在する複数の噴気孔の状況に変化はなく、赤外線映像装置による観測でも地熱域の状況に特段の変化はありませんでした。

・地震及び微動の発生状況（図1-④、図5）

アトサヌプリ（硫黄山）浅部の地震活動は低調な状態で経過しました。アトサヌプリ西側の地震活動は、今期間、低調に経過しました。同領域では、2021年頃から地震活動がやや活発な状態となりましたが、2023年後半から次第に低下する傾向が認められており、2024年2月以降は特段の増加等は認められません。

火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図6）

GNSS連続観測では、2021年秋以降、アトサヌプリ西側（硫黄山の西方約5km）の深部での膨張を示すと考えられるわずかな変化が認められていましたが、2024年1月以降停滞しています。

この火山活動解説資料は気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

次の火山活動解説資料（令和6年8月分）は令和6年9月9日に発表する予定です。

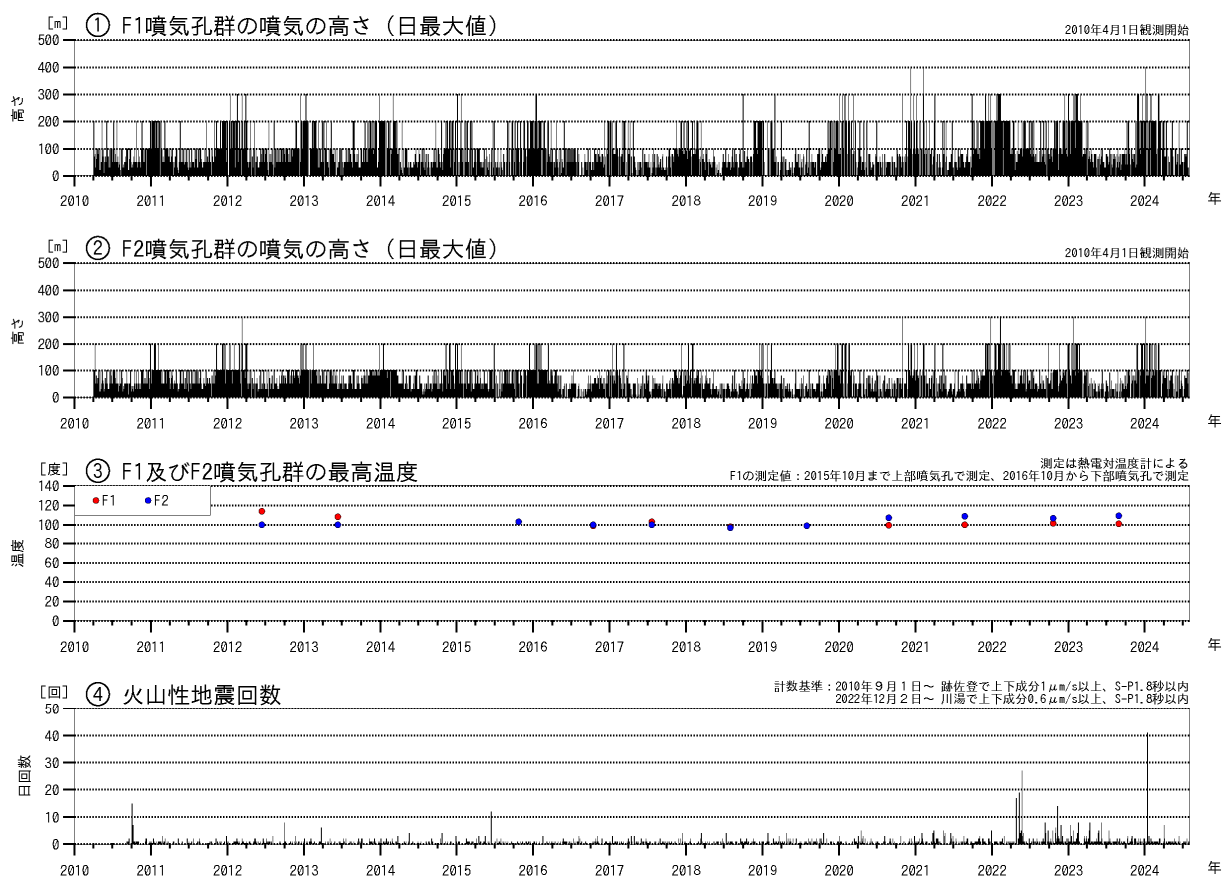


図1 アトサヌプリ 火山活動経過図（2010年4月～2024年7月）



図2 アトサヌプリ 北東側から見たF 1 噴気孔群及びF 2 噴気孔群の状況
（北東山麓監視カメラによる）

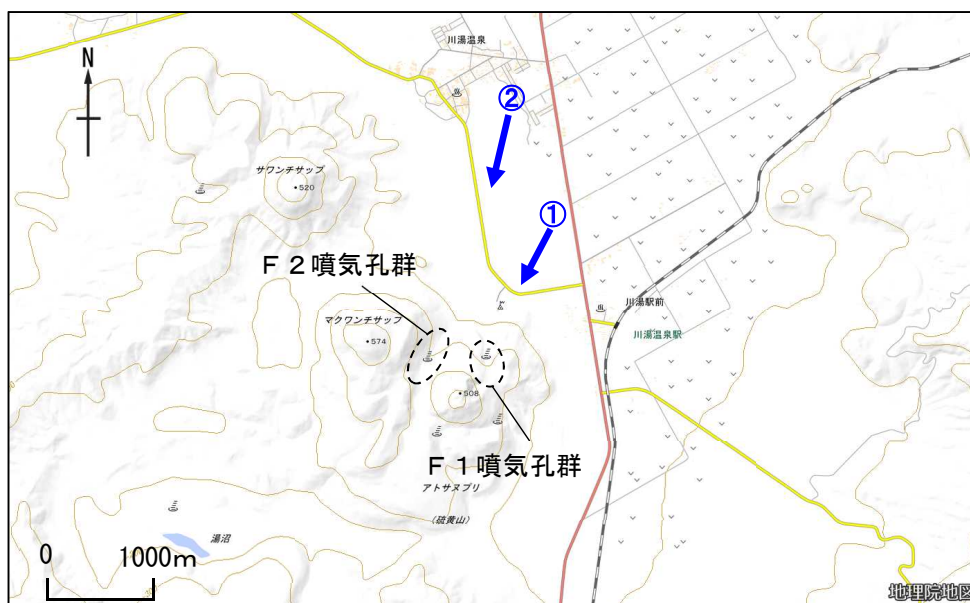


図3 アトサプリ 周辺図と写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）

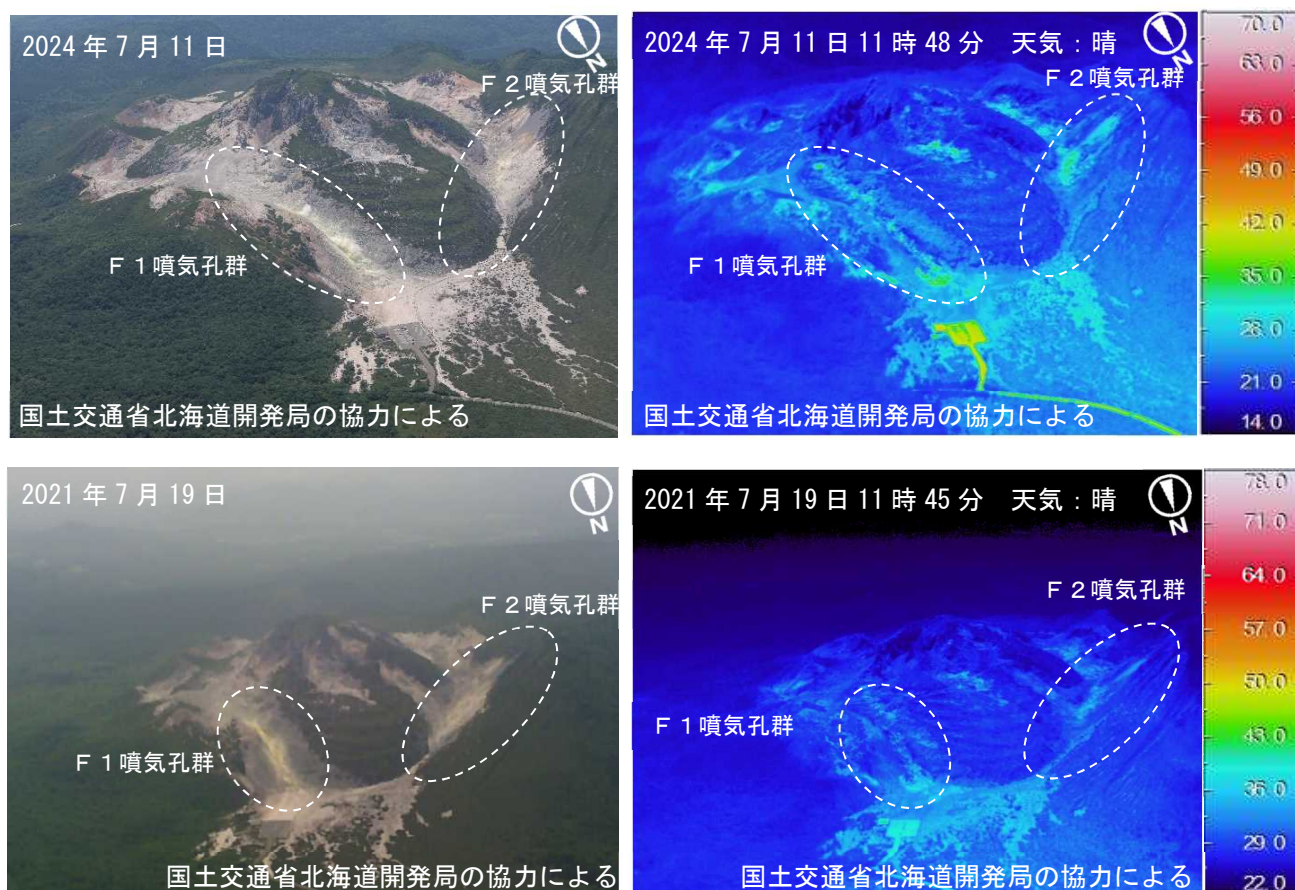


図4 アトサプリ 赤外熱映像観測装置によるF1噴気孔群及びF2噴気孔群の地表面温度分布

上：北側上空（図3の①）から撮影

下：北側上空（図3の②）から撮影

・噴気の状態や地熱域（白破線内）に特段の変化はみられませんでした。

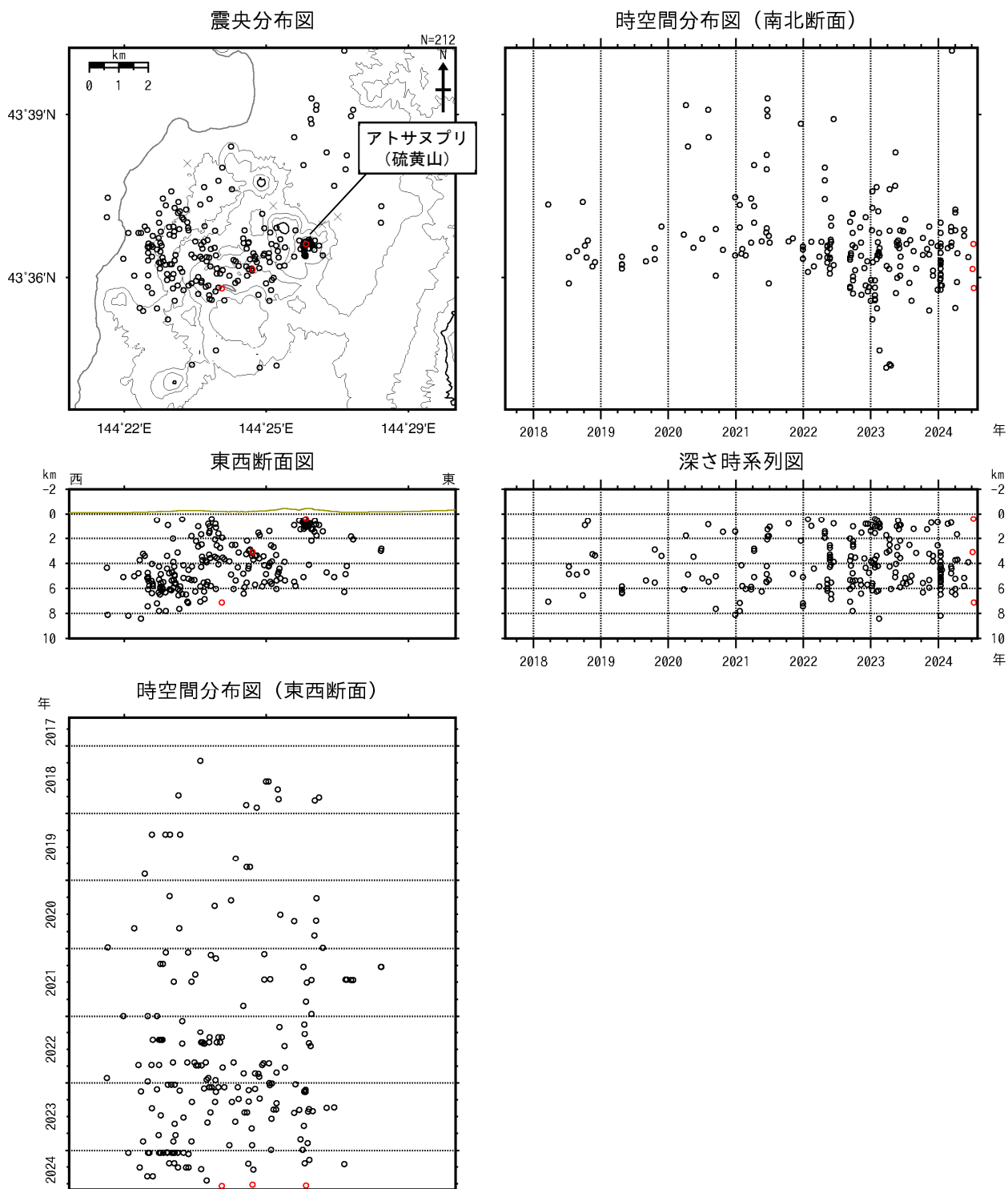
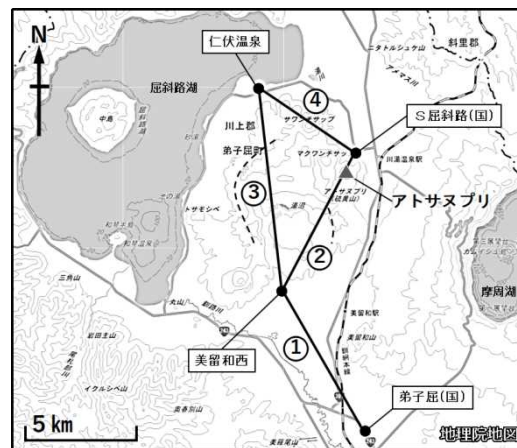
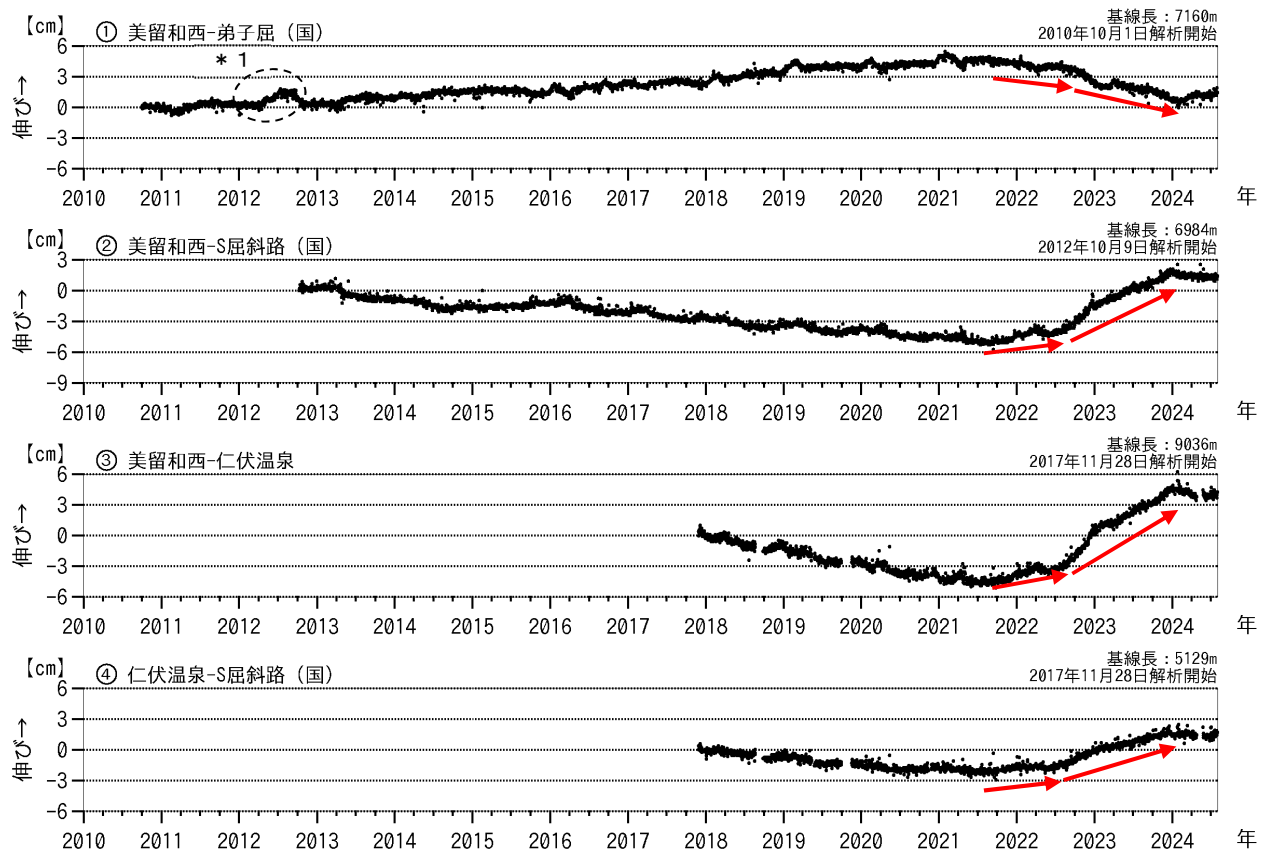


図5 アトサヌプリ 火山性地震の震源分布（2017年8月～2024年7月）

○：2017年8月～2024年6月の震源 ○：2024年7月の震源 ×：地震観測点



アトサヌプリカルデラの
--- カルデラ縁(勝井, 1958) * 2

図6 アトサヌプリ GNSS連続観測による基線長変化（2010年10月～2024年7月）及び観測点配置図

冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

①の破線内の変動（* 1）は、弟子屈（国）付近の樹木の影響及び伐採によるものです。
グラフの空白部分は欠測を示します。

* 2 勝井義雄（1958）阿寒・屈斜路火山群、地球科学、39巻。

- ・各基線①～④では、2021年秋頃からアトサヌプリ西側深部の膨張を示す基線長の変化が認められていましたが（赤矢印）、2024年1月以降は停滞しています。

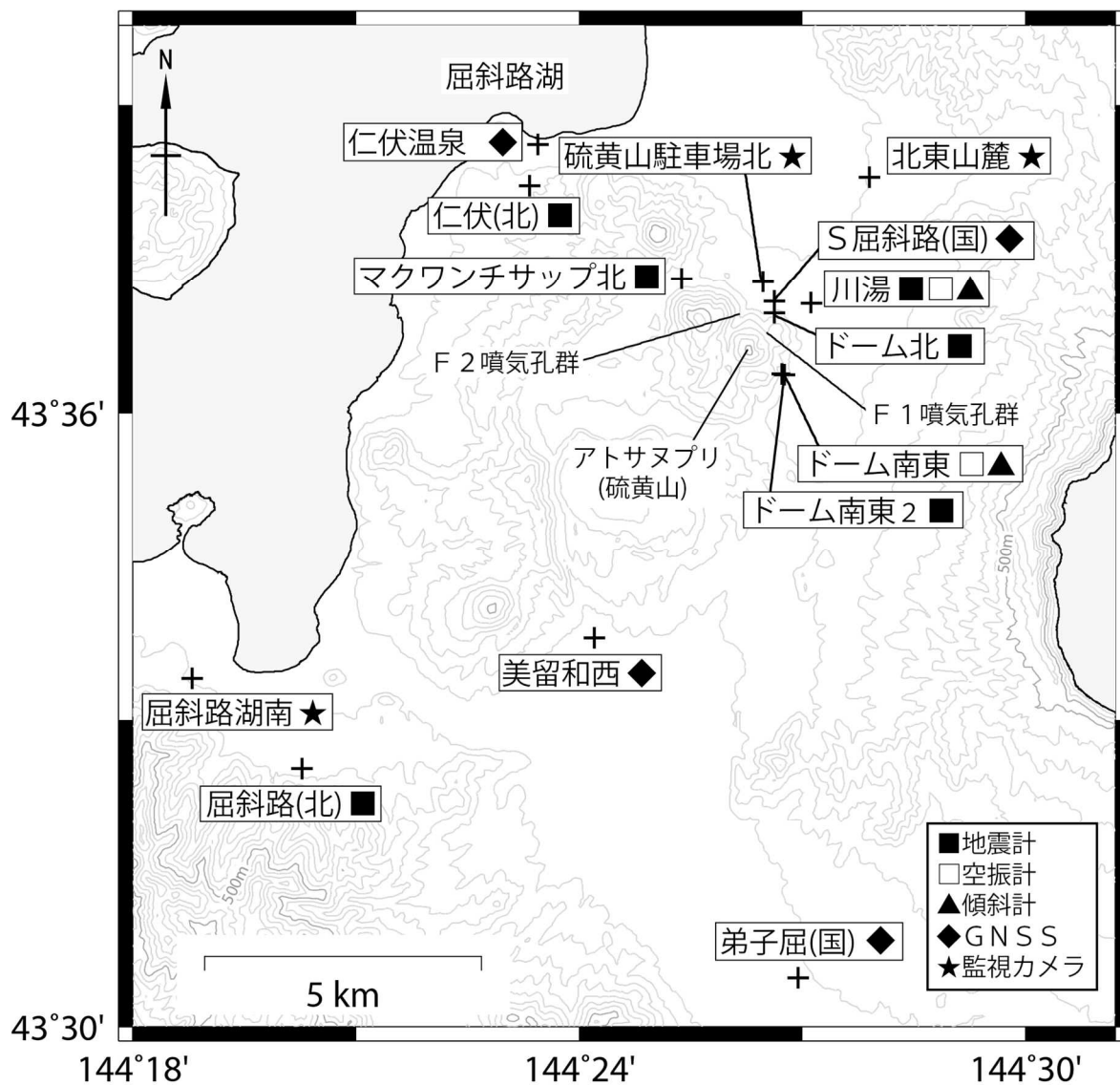


図7 アトサヌプリ 観測点配置図

＋は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

(国)：国土地理院

(北)：北海道大学